

論文の内容の要旨

論文題目 歩行開始期の仲間関係における自己主張の発達過程に関する研究

氏名 野澤 祥子

他者とのやりとりにおいては、互いの意図や要求がぶつかり合う場面がたびたび生じる。こうした葛藤的場面で明確に自己の意図や要求を伝えることは、主体的に他者と関わっていく上で重要だと考える。一方で、自分の要求を力で押し通そうとすれば、友好的な関係性を築くことは難しいだろう。他者とよい関係を維持しながら自分の要求を明確に伝えるために有効な方法の一つは、言葉で自己主張することであると考えられる。では、仲間関係での自己主張の発達において、言葉で自己主張し合うやりとりは、いつ頃どのような過程を経て生じてくるのだろうか。

先行研究によると、歩行開始期(1～2歳代)の子ども同士のやりとりにおいては、相手の玩具を取り上げようとしたり、身体的攻撃を示したりすることによって自分の要求を押し通そうとする行動が比較的多い。その一方で、2歳頃には言葉による自己主張も示され始める。このように、仲間関係における自己主張に関して、歩行開始期からの発達的变化の様相がある程度は明らかになってきている。しかし、検討が不十分な点として以下の5点が挙げられる。

1) 歩行開始期という低年齢の子どもが自己主張する場合には、不快情動を表出することも多いと考えられるが、そうした情動的側面の検討が十分になされていない。2) 自己主張の発達的变化は集団の平均値等の推移によって検討されており、個々の子どもの発達的变化の道筋を考

慮した分析があまり行われていない。3) 自己主張は他の子どもとのやりとりにおいて生じるものだと考えられるが、先行研究では自己主張を主に個人のスキルとして扱っており、自己主張を含むやりとりの発達的变化についてはあまり検討されていない。4) 自己主張の発達的变化がどのような過程を経て生じるのかを検討した研究はあまりみられない。5) 保育者の介入が子どもの自己主張の発達にどのように貢献するのかが十分に検討されているとはいえない。

本論文では、以上の5点について検討することで、歩行開始期の仲間関係における自己主張の発達過程を詳細に明らかにすることを課題とした。分析にあたってはFogelらの提唱した「関係的一歴史的アプローチ」を参照した。これは、他者とのやりとりや関係性をダイナミックなシステムとして捉え、その発達の移行の過程を個々のケースごとに分析する研究のアプローチである。研究の構成としては、研究1と研究2で関係的一歴史的アプローチへの準備として、子どもの自己主張の発達の変化および保育者の介入をより精緻に把握した。研究3と研究4では、これらの研究の結果に基づき、関係的一歴史的アプローチを参照しながら、自己主張を含むやりとり(以下「主張的やりとり」)の発達過程を分析した。なお、以上の4つの研究では、1公立保育所の1歳児クラス10名(男児4名、女児6名)と担当の保育者(女性3名)を対象とした、約1年間の縦断的観察によって得られたデータを分析した。また、自己主張は「他児との間に葛藤が生じていたり、潜在的に葛藤を含む場面において、自己の要求や意図、または他者の行動に対する拒否や不快な情動等を、表出あるいは伝達しようとする行動、また、自己の要求を実現しようとする行動」とした。

研究1では、仲間関係における自己主張の発達的变化の検討を行った。まず、自己主張に伴う情動的側面に関して、特に発声・発話の声の情動的トーンを検討した。また、潜在曲線モデルを用い、月齢(誕生月)による個人の発達的变化のパターンの違いを考慮した分析を行った。さらに、その結果に基づきつつ個々の子どもの発達の軌跡を追跡することで、子どもの発達の軌跡の共通性から一般化されうる発達の傾向を探った。

潜在曲線モデルによる分析の結果、誕生月(4月から3月まで約1年の幅がある)の違いによって発達的变化のパターンが異なっていることが示された。さらに、子ども間に共通する発達の傾向を検討した結果、不快情動の表出を含む自己主張は2歳頃をピークとして減少に転じる一方、2歳後半にかけて不快情動の表出や身体的行動を伴わない発話が増加することが示された。言葉による自己主張でも、特に不快情動を伴わない場合は、より明確に自己の要求を伝え、互いの意図調整にもつながりやすい可能性が考えられる。そこで、研究3と研究4では、こうした変化が生じる2歳代の発達過程を分析することとした。

研究 2 では、保育者が子どものどのような自己主張に対してどのような介入をするのかを検討した。その結果、保育者は子どもの行動や情動状態、発達程度に応じた介入をしていた。保育者は、このことによって、子どもがそれぞれの行動の社会的意味や、葛藤調整の方法を効果的に学習する機会を提供している可能性が考えられる。こうした介入とその後の子どもの自己主張の発達との関連について、研究 4 でさらに詳細な検討を加えることとした。

研究 3 では、関係的一歴史的アプローチを参照しながら、主に 2 歳代における主張的やりとりの発達過程を検討した。分析では、年度の前半に 2 歳の誕生日を迎えた 5 名を対象とし、特に子ども間に共通する発達的变化に焦点を当てた。

まず、主張的やりとりのパターンを分類し、それぞれのパターンの発達の軌跡を検討した。その結果、Ⅲ期の事例数が極端に少なかった 1 名を除く 4 名の子どもに関してはかなり類似した傾向がみられた。Ⅰ期(5~8 月)には、物の取り合いや攻撃、不快情動の表出を伴う発話などによって葛藤がエスカレートするやりとりのパターンが優勢であった。Ⅱ期(9~12 月)になると、平静な口調の発話(不快情動の表出を伴わない発話)も含むやりとりが増加した。さらにⅢ期(1~3 月)になると、言葉で働きかけ言葉で応答するというやりとりが成立するようになり、平静な口調の発話のみでやりとりするパターンの割合が 3 割程度に増加した。「あとでかして」や「まってて」といった交渉的表現がみられるようになり、初めに順番や遊びについて言葉で相互理解を形成するやりとりも出現した。

次に、こうしたやりとりのパターンの変化がどのようにして生じるのかについての示唆を得るため、やりとりの展開過程を事例も参照しながら詳しく検討した。その結果、Ⅱ~Ⅲ期に、激しい葛藤に発展しそうな場面において、一方の子ども相手の意図を考慮する発話が、他方の不快情動や行動を調整し、さらにその後の交渉の展開を促す場合がみられた。意図理解の発達を背景として出現してくると考えられるこうしたやりとりが、Ⅰ期で優勢であった不快を表出し合うパターンを変化させ、Ⅲ期に増加してくる平静な口調の発話のみでのやりとりへの「橋渡し」をする役割の一部を担う可能性が考察された。

研究 4 では、個別の子どもが経験した主張的やりとりの発達過程について質的分析を行い、やりとりの文脈も含めて検討した。また、研究 3 で検討することができなかった、他児との関係性や保育者の介入と発達過程との関連についても検討を加えた。分析においては、関係的一歴史的アプローチにおけるナラティブ分析の方法を参照し、主張的やりとりの事例が多くみられた B(男児、4 月生まれ)と E(女児、7 月生まれ)について、それぞれの子どもが経験した主張的やりとりの発達過程を記述した。その結果、以下の点が示唆された。

まず、BとEに共通して、I期から少しずつ平静な口調の発話がみられ、その後の変化につながっていった。また、I期にみられた他児との友好的なやりとりの萌芽が、II期からIII期にかけて発展し、他児と一緒に遊ぶ場面での主張的やりとりがみられるようになった。こうした関係性の変化が、自分の主張を通したいという気持ちに揺れを生じさせ、相手の意図を考慮したり、行動や情動表出を調整したりするやりとりへの動機づけとなったことが考えられる。一方、保育者との信頼関係が他児との関係性の発展の基盤となった可能性も示唆された。ただし、こうした他児や保育者との関係性や主張的やりとりの変化が出現するタイミングは、BとEでは異なっていた。また、他児とのやりとりの過程やその発達的变化も、それぞれの相手の子どもの特性との組み合わせによって違っていた。仲間関係における自己主張の発達過程には、先行研究で指摘されてきた子ども個人の認知的・社会情動的スキルだけでなく、他児や保育者との関係性、さらにそれぞれの関係性の絡み合いが関連している可能性が示唆された。

以上のように、4つの研究の結果、主張的やりとりが再組織化され、言葉によるやりとりが生じてくる過程が示唆された。その過程とは、要約すると「2歳代における意図理解の発達に加え、保育者との信頼関係を基盤とする他児との友好的な関係性の発展を背景として、相手の意図を考慮するやりとりが生じる。それをきっかけの一つとして不快情動を表出し合うやりとりのパターンが変化し、2歳後半には、強い不快情動の表出を伴わずに言葉で自己主張し合うやりとりが成立してくる。」というものである。ただし、研究では1公立保育所の1歳児クラスを対象とした縦断的観察によって得られたデータを分析しており、得られた知見の一般化可能性には限界がある。また、研究3や研究4の結果は、自己主張が比較的多い子どもにあてはまるものだと考えられる。さらに、研究3や研究4では、事例の質的分析によって発達過程を検討しており、解釈の妥当性についての限界を認識しておく必要がある。今後は、複数の保育所を対象とした観察や、異なる特性を持つ子どもについての分析を行うことが必要である。また、分析結果について他の研究者や保育者の意見を聞くなどして、本論文で示した知見をさらに精緻化していくことが求められる。